

冬季五輪を目指して何度でも立ち上がる！ 「下町ボブスレー」の挑戦とジャマイカ

奥山 睦

プロジェクトメンバーの晴れやかな顔に秘められた 苦難の歴史

大音量のレゲエミュージックが流れ、華やかな色彩の衣装でリズムカルなダンスに興じるジャマイカの人たち。周辺にはレゲエのCD、Tシャツやアクセサリーなどの雑貨、ジャークチキンやオックステールなどのフードの屋台が並ぶ。

2016年6月28・29日の両日、「One Love Jamaica Festival(ワンラブジャマイカフェスティバル)」が東京・お台場で開催された。

同フェスティバルは、2004年にジャマイカと日本の国交樹立40周年を記念してスタートした、両国親睦を図るためのイベントである。

ジャマイカ大使館のブースの隣に、ひときわ目を引く黒いマシン、「下町ボブスレー」が展示されていた(写真1)。希望者は搭乗もできる。来場者はかわるがわる応援旗にメッセージを書きこんでいた。「平昌五輪を目指して頑張っ！」「滑走入魂」など。



写真1：「One Love Jamaica Festival」で展示された下町ボブスレー
出所：2016年6月28日、筆者撮影

「下町ボブスレーネットワークプロジェクト」のメンバーたちは、搭乗体験をする人たちに座り方や操縦の仕方、マシンの部位についてなどの説明を熱心に行っていた。その顔は実に晴れやかだ。しかしつい数ヶ月前は、こんな日がやってくるとは、メンバーたちも夢にも思っていなかったに違いない。

「できる」と信じてスタート！

「下町ボブスレーネットワークプロジェクト」は大田区の中小製造業約100社とその主旨に賛同したF1マシンの製造を手がける滋賀県の株式会社東レ・カーボンマジック、空力解析ソフトによる解析を行う大阪府が本社で、大崎に支社を置く株式会社ソフトウェアクレイドル、トライボロジーの研究を行う東京大学大学院工学系研究科機械工学専攻 加藤孝久研究室等が共同で、国産による2人乗りのボブスレーソリを開発し、冬季五輪出場を目指すプロジェクトである。

同プロジェクトの発祥は2011年9月5日に遡る。公益財団法人大田区産業振興協会(以下大田区産業振興協会)の小杉聡史というひとりの職員が、A4サイズ2枚のボブスレーのソリの寸法図をもって町工場を訪問したところから始まった。

この時点では、発案者の小杉もプロジェクトへの参加要請を請けた前実行委員長の細貝淳一(株式会社マテリアル 代表取締役。任期は2012年1月31日～14年5月31日。現ゼネラルマネージャー)もボブスレーのソリを見たことも触ったこともなかった。

それでも小杉も細貝も「できる」と信じて同プロジェクトはスタートした。細貝は1992年に26歳で株式会社マテリアルというモノづくりのベンチャー企業を創業した。細貝は最初に「やるべきことに不可能はない」と仮説を立ててスタートする。この細貝のリーダーシップが、同プロジェクトを現在に至るまで強力に牽引してきたのである。

工賃無償による製造と試合結果によって共感が広がる

同プロジェクトの大きな特徴としては、大田区の工場激減の現状に危機感を抱いた30～40代の2代目、3代目の経営者が中核メンバーとなっていることである。

そして、フレーム部品製造約250点は、町工場がすべて無償で製作している、という事実には驚きを隠さずにはられない。

価格の価値にしばられない優れた製品が大田区ではできる——。その確信が同プロジェクトの中小製造業各社を動かした。最初に製造した女子1号機のときの納期は10日、加工費は無償という条件だった。

2012年11月に1号機が完成し、同年12月、長野

市ボブスレー・リュージュパークにて開催された全日本選手権女子2人乗り（吉村・浅津チーム）にて、実戦デビューを飾り、いきなり優勝した（写真2）。

実際に、製造されたソリが結果をともなってきたことによって、繰り返し国内外のメディアに「下町ボブスレー」が報道され認知度と共感が広がったのである。



写真2：2012年12月23日長野で開催された全日本選手権で初滑走し、女子2人乗りで優勝を飾る。出所：下町ボブスレーネットワークプロジェクト

日本ボブスレー連盟から下された二度の五輪不採用宣告

その後、着々と新型マシンの製造を進め、2013年10月8日には、一般社団法人日本ボブスレー・リュージュ・スケルトン連盟（以下日本ボブスレー連盟）と大田区産業振興協会、下町ボブスレーネットワークプロジェクト推進委員会の3団体が五輪に向けての包括的協定を締結した。ところがその翌月11月26日に日本ボブスレー連盟から五輪不採用を言い渡されたのである。これによって残念ながら、2014年2月、ロシアで開催されたソチ五輪には、出場することができなかった。

しかし、ここからが同プロジェクトの底力の見せ所だった。1月後の2013年12月22日の全日本選手権に、下町ボブスレー1・2・3号機で参戦し、2号機の男子2人乗りで脇田・中村チームが準優勝となった。

その後も2018年、韓国で開催される平昌五輪に向けて、国内外の大会に参戦し改修・製造を続けている。

2014年12月23日の全日本選手権では、下町ボブスレー1～4号機が出場し、2号機の女子2人乗りで準優勝（浅津・熊谷チーム）した。

次の五輪には出場できるのではないか――。

大田区中の誰もが祈っていた。ところが2015年11月17日に、日本ボブスレー連盟より2度目の五輪不採用の通知が届いたのである。

翌月12月20日の全日本選手権では、下町ボブスレー1・5号機で参戦し、5号機の男子2人乗りで4位（三上・瀬間チーム）という結果だった。

これによって、一時は平昌五輪への夢も潰えたかのように思えた。しかし、すべては同プロジェクトが、次のステージへ進むためのプロローグだったのである。

ジャマイカ五輪チームとタッグを組む

2016年1月17日・18日。ジャマイカボブスレー連盟と下町ボブスレーネットワークプロジェクトの共同記者会見が長野・東京で開催された（写真3）。「ジャマイカチーム、下町ボブスレーを平昌五輪に採用へ」という発表だった。誰もがそれを聴いて度肝を抜かれた。日本ボブスレー連盟より二度目の五輪不採用を宣告された、わずか2ヶ月後のことだったからである。

しかし同プロジェクトは、2015年4月より、海外での五輪採用を目指して、着々と準備を進めていた。

2015年4月29日には、プロジェクトチームがジャマイカ大使館を訪問し、下町ボブスレーについて五輪を目指しているソリであること、チャンスがあったら試走して欲しい旨を交渉した。同年12月16日にはソリの無償提供を申し出た。ソリのカスタマイズ、試走の機会の提供をジャマイカチームに打診したのである。17日、ジャマイカボブスレー連盟ネルソン・クリスチャン・ストークス会長から「テスト結果が良ければ採用する」との返信があった。

年が明けて2016年1月15日～17日、長野でジャマイカ選手が搭乗して滑走テストを行い、良好な結果を叩き出した。その結果を受けての記者会見だった。この日、プロジェクトメンバーは万感の思いで、ジャマイカナショナルチームと肩を並べて会見に臨んだ。

ストークス会長は、デザイン性に優れていること、操作性が高いことなどから、上位を狙うチャンスが十分あるソリだと評価し、好感触だった。

プロジェクトが発足して約4年が経過した。決して順風満帆な道のりとは言えなかった。そしてタッグを組む国は、なんとジャマイカという妙味。

『クールランニング』という映画がある。1988年、カナダのカルガリー冬季五輪に雪を見たことのない常夏の国・ジャマイカの選手たちが、ボブスレーに挑戦し奮闘した実話を基にしたコメディ映画である。ちなみにタイトルの“Cool Runnings”は「良い旅を」という祈りの言葉だという。



写真3：2016年1月18日ジャマイカボブスレー連盟と下町ボブスレーネットワークプロジェクトの共同記者会（大田区） 出所：株式会社ウイル

何が不可能で何が可能であるかは、やってみなければわからない。「できる」と信じて挑戦し続けること。そこにジャマイカチームと下町ボブスレーネットワークプロジェクトの思いが重なる。

下町ボブスレーの冬季五輪への挑戦は、端緒にすぎたばかりである。しかし旅路は険しければ険しいほど得るものは大きいに違いない。

良い旅を！

（おくやま むつみ 株式会社ウイル代表取締役、
静岡大学大学院総合科学技術研究科客員教授）

【参考資料】

- 大田区『大田区ものづくり産業等実態調査』大田区 2016年
- 奥山睦『下町ボブスレー』日刊工業新聞社 2013年
- 奥山睦『地域イノベーション』『下町ボブスレーネットワークプロジェクト』に見るソーシャル・キャピタル』VOL.7 67～81
頁法政大学地域研究センター2015年
- 下町ボブスレーネットワークプロジェクト公式サイト
<http://bobsleigh.jp/> 2016年5月30日確認
- One Love Jamaica Festival 公式サイト
<http://onelovejamaicafestival.jp/>2016年6月12日確認

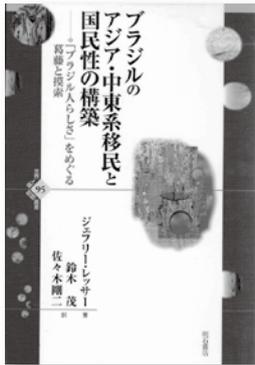
編集部注：2016年7月14日 共同通信配信は、以下のように報じている。

ジャマイカにそり3台提供 下町ボブスレー、10月から順次

東京都大田区の町工場が中心となって国産のそりを開発する「下町ボブスレー」のプロジェクト推進委員会は14日、大田区内で記者会見し、2018年平昌冬季五輪に向けて、ジャマイカ・ボブスレー連盟と2人乗りのそり3台の無償提供で正式契約に調印、2種類を製作して10月から順次納入すると発表した。推進委によると10月に完成予定の「下町スペシャル」は、これまでに開発したモデルの中で最も空気抵抗が小さい。もう1種類はジャマイカ側の技術者の設計を採用して小型化を徹底した「ジャマイカスペシャル」で、12月から2台納入する。

（<http://this.kiji.is/126250353670766596>）

ラテンアメリカ参考図書案内



『ブラジルのアジア・中東系移民と国民性の構築
- 「ブラジル人らしさ」をめぐる葛藤と模索』

ジェフリー・レッサー 鈴木 茂・佐々木剛二訳 明石書店
2016年3月 394頁 4,800円+税 ISBN978-4-7503-4296-2

ブラジルの支配層のアジア系・中東系移民の受け入れ是非をめぐる言説と、ブラジル社会の中で独自のエスニックな空間を築いている主にレバノン・シリア人と日本人移民のアイデンティティ構築をめぐる闘いを、米国のブラジル史学者が考察したもの。

多様な人種・民族の移民から成るブラジル社会は人種隔離がないと言われるが、それは欧州文化とカトリック信仰への同化が暗黙のうちにあるからで、民族の異質性を維持しようとすると同化とされ排除される。ブラジルの多人種性は欧州白人・先住民インディオ・アフリカからの黒人の三人種融合と言われるが、その人種混濁は植民地時代初期までは白人と先住民、独立以降は白人と黒人の混濁が前提の国民統合であった。その中でマイノリティである後発の中東アラブ系・ユダヤ系・日系のエスニシティが存在し独自の空間を確保しようと闘ってきたことに着目し、その闘いと「ブラジル国民」の概念にもたらした変化を明らかにしようとしている。ブラジルを欧州的に改造しようと考案された数々の移民政策が、実際には極めつきの多文化社会を創造したという指摘は興味深い。

（桜井 敏浩）



『マプチェの女』

カール・フェレ 加藤かおり・川口明百美訳 早川書房（文庫）
2016年2月 654頁 1,200円+税 ISBN978-4-15-181601-7

アルゼンチンの土地には、スペイン征服者が到来した時にはマプチェ、アラウカノその他多くの先住民が住んでいたが、彼らの多くは殺され土地を奪われた。さらに1877～83年のロカ將軍指揮で始まった「砂漠の征服作戦」では組織的な先住民虐殺によって20万人いたパンパ・パタゴニアの先住民は2万人まで激減した。マプチェ族の娘ジャナは、今は郷里を飛び出しブエノスアイレスにきて大学で美術を専攻し彫刻を造っているが、生活費は売春で稼いでいる。姉妹のように親しい仲間の男娼パウラからやはり仲間の男娼ルスが失踪し、ボカの岸壁から惨殺屍体が収容されるのを目撃したと聞く。警察が捜査しようとしなないため、ジャナはかつて軍事政権時代に父と妹を殺され、闇に葬られた「行方不明者」の探索をしている私立探偵のルベンに殺人究明の協力を求めるところから始まる。

このルスの殺害が、過去の独裁政治下（アルゼンチン、チリ、ウルグアイの軍事政権は反対者、左翼活動家弾圧で協力しあった）で猛威を振るい、その後も民政移管後の恩赦法で罰を免れてきた軍警とその手下の秘密組織の手にかかったことが次第に判ってくる。行方不明者の母親や妻たちによる真相究明を求めて毎週でデモを行い、独自の調査を行っている「五月広場母・祖母たちの会」の有力メンバーには、ルベンの母も加わっている。その多くは若者であった失踪者たちは拷問され、遺体は人知れない場所に埋められるか飛行機からラプラタ河口に落とされたが、親と一緒に拉致されたり拘留中に産んだ乳幼児は、極秘裏に政権支持者の希望者に里子に出された。

事件は軍政終焉時に証拠隠滅で処分された筈の行方不明者の収容記録の詳細なリスト—そこには尋問担当官などの氏名も載っている—のコピーの一部が秘密組織員だった元記者から次期大統領候補の有力支援者の大物実業家の娘で、親に反旗を翻してジャーナリストになり、自分の親も略取者だったとの疑念を抱いているマリアの手に渡ったことから彼女自身も誘拐・殺害され、接触あった者たちも次々に殺され、また捜査に動いたジャナとルベン、その協力者たちにも魔の手が迫り、ブエノスアイレス市内と郊外の水郷別荘地帯のティグレ、チリとの国境地帯のチュブ州の山間修道院と場所を変えつつ、軍政時代の將軍以下の組織の残党と彼らの捨て身の闘いが…と、息を呑む展開が繰り広げられるハードボイルド小説。 (桜井 敏浩)